

「バトンを繋ぐわたしたちの挑戦」

東北・北海道地区 青森県 つがる弘前農協女性部

齊 藤 き み

大きくなったりりんごの実に眩しすぎる光が降り注ぐ夏の弘前は、歴史と文化の街として津軽平野の南部に位置する、人口18万人の城下町です。西に秀峰岩木山を望み、南にブナの原生林で知られる白神山地が迫り、北には岩木川が横たわる穏やかなこの地にも、経済や環境の変化の“ツケ”が日々の生活に重くのしかかり、今を生きるのに精一杯の状況です。

そんな中で、女性部活動はストレス解消の場であり、また平成15年の農協合併と同時に、6つあった女性部も合併して以来、本部役員を務めている私にとっては、時にはストレスが溜まる場所でもあるのです。

しかし、女性部員にはできるだけ負担の少ない、ストレスを解消するための活動の場を提供していきたいと考え、農協役職員の方々や家の光協会等のアドバイスにより、3年前にサークル活動を立ち上げました。サークル活動は女性部の起爆剤となり新たな仲間の加入により部員が1,000名を超えただけでなく、女性部の絆を大いに深めました。

さまざまなサークル活動の中でも「海外体験ツアーに行こう会 in 韓国」と銘打ったサークルは、農協へ約2年間、1日ワンコイン（100円）、1ヶ月3,000円の定期積金を行い、昨年実施となりました。20代から70代まで総勢50名が3泊4日の旅を満喫し、少しは参加した皆さんの視野が広がったのでは、と感じています。

ツアーのメインは利川農協^{リセン}ハナロクラブ・セマウル婦人会との交流会です。言葉が通じない方々とのふれあいに戸惑いもありましたが、セマウル婦人会の手厚い出迎えに、不安だった気持ちが一気に楽になりました。参加者全員が民族衣装のチマチョゴリに着替え、伝統料理であるチヂミやソンピョン（御餅）の作り方を丁寧に教えてもらい、キムチ作りにも挑戦しました。

お昼はみんなで作った料理を食べながら、お互いの活動についての情報交換を行ないました。また弘前からお礼にと持っていった浴衣^{ゆかた}や半纏^{はんてん}をセマウル婦人会の方に着ていただき、津軽の代表的な盆踊りの唄に合わせて全員が輪になって踊りました。お互いの文化や言葉には違いがあっても、笑って、泣いて、心の通じ合った本当の交流を持つことができたと思っています。「ぜひまた逢いたいね。今度は青森に来てね。」手を取り、涙ぐみながら、再会を誓ってのお別れ

です。出迎えてくださった時の^{サムサンリ}農樂（韓国伝統芸能）の太鼓の音や踊りの一場面が、半年たった今でも目をつむると鮮やかに蘇ります。後日、今回のサークルに理解を示してくださった組合長にお礼と報告に伺ったところ「この度の経験を活動の活性化に繋げてほしい。」と激励の言葉をいただきました。

また、参加した女性部員からも「普通の旅行ではできない良い経験ができた。この感動を励みに頑張ろうと思う。」等たくさんの声を聞くと、相次ぐ降霜や降雪などにより、けっして楽ではない状況の中で実行したことに、執行部一同ホッと胸を撫で下ろしました。

サークル活動は「脱・メタボサークル」や「エコ（節約）サークル」、「地産地消サークル」、また「海外体験ツアーに行こう会」は2年後の台湾女性部との交流にバトンを繋ぎ、今年度もたくさんのユニークな活動が展開されています。新しい事に挑戦する女性部の姿勢は回りに良い影響を与え、変化の早い時代の流れに対応するきっかけにもなることでしょう。

女性部にとって部員に対する活動も大切ですが、組合員やその家族の方々に知ってもらうことも大事な活動であり、役目ではないかと思っています。その活動こそが商品研究グループ活動です。グループが発足したのは旧弘前市農協時代の昭和44年、私が女性部に加入する以前から、今も続いている活動なのです。農協で取扱いしている生活、生産資材の品質、性能の調査や、より良い商品を取り入れていくことを目的に、女性部事業としての商品の取扱いの意義、また、消費者としての知識を高めるためのグループでもあります。農協が全面協力というよりも、むしろ農協から持ち上がった活動であり、いわば女性部とのコラボレーション（共同）活動なのです。これは合併後も変わることなく、6支部から選出されたグループ員が年に数回、商品についてのチェックや勉強、工場の視察研修も行なっています。

商品研究グループの研修会においてジュースで毛糸の染色実験を行なった結果、当時の婦人部で色つきジュースのボイコット運動に発展、さらには合成洗剤から石けんにきりかえる運動、エコープ肌着着用運動等、「安心」「安全」にこだわった商品を取り入れる精神が、現在の「部員一人1ヶ月、1,000円共同購入運動」へと繋がっているのです。

また、当農協における数多くのヒット商品はこのグループから発信しているといっても過言ではありません。グループ員が太鼓判を押した商品については必ず共同購入で取り上げており、購入した部員からの意見や要望は真摯に受け止め、その旨をメーカーに伝え、改善や納得できる説明をお願いしており、できる限り使う人の身になって取り組んでいます。

数年前、女性部は“物売りか”との批判の声に、商品研究グループの存続が危ぶまれた時期もありましたが、女性部にとって、この活動こそが基本中の基本であり、永遠にバトンを繋いでいかなければいけない活動なのです。

全国女性協では「JA女性 かわろう かえよう」宣言を実践していますが、全ての原点は「安心」「安全」の精神であり、新たな活動や事業を立ち上げる時もその事が根底に脈々と受け継がれている女性部の不変さに、今更ながら驚いています。

この思いは次世代を担う子供たちの活動へも繋がっています。女性部で行なっている児童センターの子供たちを対象にした「キッズめぐりスクール」も3年目を迎えました。また、農協では食育活動として小学校の総合学習の時間に「農業塾」を開催しています。特に今年度は「キッズめぐりスクール」と「農業塾」で学んでいる子供たちが合同で、野菜の販売会やエルダーミセス部会にお手玉を教わるなど、夏休みの1日を有意義に過ごして欲しいと農協主催による「いただきます！農業塾フェスタ」を女性部も協力して、初めて開催することになりました。この原稿を読む頃には、きっと大成功に終わり、私の頭の中は子供たちの笑顔でいっぱいになっているはずです。

昔からの活動も、新たな活動も、子供たちの未来や故郷への愛情がある限り、私たちはもっと、もっと、大きくステップアップできるはずです。これから引き継いでくれるであろう若い世代にバトンを繋いでいくために、女性部で培った「食」と「農」に対する「安心」「安全」の精神を胸に・・・